

## サルトル『ボードレール』のパラテキスト

Point du Jour 版 *prépublication* を対象とした調査の中間報告

重見 晋也

### はじめに

テキストが読者の受容に託されるためには、何からの媒体を通して読者の眼前にテキストが現前しなければならないことはいうまでもない。中世以前においては媒介となる朗読者の存在が知られており、声を媒介してテキストは受容された。印刷技術の登場と共に、テキストは紙に印刷されて流通し受容されるようになるが、それは一つのテキストのみを含む一冊の刊本という形態をとることもあったし、複数の作者による複数のテキストを一冊にまとめた複合的な形態をとることもあった。いずれにせよ、「作品」が書物という複合体の部分を構成するようになるまでには、現代において「作品」が出現するよりもはるかに多様な道程を想定することができたのである。

18 世紀や 19 世紀になると新聞や雑誌といった出版形態が登場し、ディドロのサロン評やロマン・フィユトンなどに見られるように、文学作品や文芸批評作品も最初の発表の場としてそれらの出版形態を利用することになる。20 世紀初頭におけるそれらの重要性については言を俟たないだろう。アンドレ・ジッドらの *La Nouvelle Revue Française* 誌やシャルル・ペギーの *Cahiers de la Quinzaine* 誌などが、新しい世代の作家の作品を世に知らしめるのに大きな役割を果たしたのは衆目の一致するところである。

作品発表の場と作品との関係やその場が作品に及ぼす影響については、画一的に説明することはできない。たとえば、作品発表の最初の場の特性が、その作品の受容を決定づける場合もある。この点に関連してジェラルド・ジュネットがしばしばあげる例が、アイルランド人の作家ジェームス・ジョイスの『ユリシーズ』の出版にまつわるエピソードである。単行本として刊行される前、*prépublication* の版では、ホメロスの『オデュッセイア』のエピソードに関連づけられるタイトルが各章に付されていたが、刊本化にあたってジョイスがそれらの題名を削除した<sup>1)</sup>。しかしながら、『ユリシーズ』の研究者は、これらの削除された章題と作品とを結びつけて論じることをためらいはしないのである。作品の発表空間としてどの新聞・雑誌を選ぶかということは、その作品がどのような読者に届けられるか、換言すればあるテク

ストの最初の受容とその評価を、決定するとはいわないまでも、方向付けてしまうといえる。

このような一般的な考察は、自由な印刷・出版が認められていなかった時代、インキュナビュラ以降 20 世紀になるまでの 400 年近くの期間、印刷・出版に対してさまざまな制約が課されていた時代には十分に当てはまるように思われる。しかし、そうした時代にあってもなお、全く異質と考えられているテキストの発表空間において、同じような言説を確認することももちろん可能である。こうした現象については、「文芸批評家サルトルとその時代 サルトル、ブラジャック、モーリアック」と題する論文において考察した<sup>2)</sup>。そこにおいて、政治的思想的にはまだ確固とした信念を確立していなかったサルトルとモーリス・バレスに心酔していた国粋主義者のロベール・ブラジャックが、1939 年に *La Nouvelle Revue Française* 誌と *Action Française* 紙にそれぞれ発表したフランソワ・モーリアック論を比較することで、サルトルのモーリアックに対する否定的評価が、当時としては必ずしも突出していたわけではなかったことを示した。

以上のような枠組みの中で、次のように考えることができるだろう。受容理論の論者が主張するように「テキストは受容されて始めて作品となる」としても、テキストが受容されるためには何らかの形で「世に出る」ことが必要なのであり、「テキストは世に出て始めて作品となる」のである。こうした観点から、テキストから作品への生成コンテキストを作品発表の場の変遷とみなし、それを一次資料として実証的に再構築することは、作品研究において重要な位置を占めることになるだろう。雑誌や新聞といった作品刊行に先立つ *prépublication* を対象とした研究の重要性は増していると考えられるのである。

文学に限らずテキストを考察対象とする研究において *prépublication* から作品への変遷を跡づけることは、複数のテキストの間に何らかの関係性を構築することを意味する。複数のテキスト相互の連関を記述することは、複数のテキストによって構築されるテキスト空間を特徴づけ、画定することであり、それはジュネットが文学研究の枠組みの中で「超テキスト性 *transtextualité*」ということばを用いて示した、テキストの超越性に基づいて語ることでもある。

## 1. テキスト関係性とパラテキスト

ジェラルド・ジュネットは 1979 年に発表し、文学ジャンルを語る際の枠組み概念、すなわち *lyrique*、*épique*、*dramatique* という三つのジャンルを再検討に付した論考 *Introduction à l'architexte*<sup>3)</sup>の中で、「テキスト関係性 *transtextualité*」ということばに

よって「相互テキスト性 *intertextualité*」、「メタ・テキスト性 *métatextualité*」、「パラ・テキスト性 *paratextualité*」、「アルシ・テキスト性 *architextualité*」の四つの範疇を提示している。これらの用語は、三年後の 1982 年に出された *Palimpsestes* において、五つのタイプに再分類されて定義し直されることとなる。*Palimpsestes* における五つのテキスト関係性とは、「抽象度、含意度、そして包括度が増大してゆくのにほぼ一致する順序」に従って、1)相互テキスト性 *intertextualité*、2)パラテキスト性 *paratextualité*、3)メタテキスト性 *métatextualité*、4)イペルテキスト性 *hypertextualité*、5)アルシテキスト性 *architextualité* であるとされる。

相互テキスト性、一般的に「間テキスト性」と呼ばれる第一のテキスト関係性は、引用や剽窃、暗示といった「あるテキスト内での他のテキストの実際上の存在」(p.16)を意味する。パラテキスト性とは、「パラテキストとはたとえば次のようなものだ—表題・副題・章題・序文・後書き・緒言・前書き等々、傍注・脚注・後注、エピグラフ、挿絵、作者による書評依頼状・帯・カバー、およびその他数多くのタイプの付随的な、自作または他者の作による標識などがそうであって、これらのものがテキストにある種の（可変的な）囲いを、そして時には公式もしくは非公式のある注釈を与える」(p.18)とされる。メタテキスト性とは、「あるテキストを、それが語っている他のテキストに、必ずしもそれを引用することなしに（それを喚び出すことなしに）、それどころか極端な場合にはその名をあげることにすらなしに結びつける関係であり、より一般的には「注釈」の関係と言われる」(p.19)ものである。またイペルテキスト性とは「あるテキスト B（これをイペルテキスト *hypertexte* と呼ぼう）を、注釈のそれではない仕方ですれが接ぎ木されるところの先行するテキスト A（もちろんこれはイポテキスト *hypotexte* と呼ぶことにする）に結びつけるあらゆる関係なのである。接ぎ木されるという隠喩、および「注釈のそれではない」という否定による限定からみてとれるように、右の定義はまったくの暫定的なものにすぎない」(pp.20-21)とされる。そして最後にアルシテキスト性とは、「言説のタイプ、言表行為の様式、文学ジャンル等、一般的ないし超越的なもろもろの範疇の全体であり、それぞれの個別的なテキストはそこに属する」(p.15)ことが示されるものであるが、「精々のところパラテキスト的言及（『詩集』、『エッセー』、『薔薇物語』等、表題による場合もあるし、あるいはもっとも一般的には表紙の上で表題の下部に付せられた小説、物語、詩、等の指示による場合もある）によってしかあらわになることのない、純然たる分類上の帰属関係」(pp.19-20)のことを指し示すものとされる。

パラテキストについてジュネットは、*Seuils* (1987)で再度取り上げ、テキストの空

間性、時間性、実体性、実践性という観点から考察し直している。そこにおいてパラテキストに含まれる要素としては、上述したテキスト要素に加えて、題、序文、インタビュー、印刷レイアウト、タイポグラフィに加えて、作者に関わるコンテキストや生成論的コンテキスト、歴史的コンテキストなどもあげられており、「すべてのコンテキストはパラテキストを構成する」と言いたくなってしまふほどである。いずれにせよそれは、「テキストとテキスト外をつなぐゾーン<sup>4)</sup>」なのであり、こうした観点からすると、作品が雑誌に刊行された場合にその雑誌の特性を明らかにすることは、パラテキストを考察していると考えられるだろう。

本論文においてサルトルの『ボードレール』を取り上げるのはこのようなパースペクティブに基づいている。同作品に対してこうしたアプローチが許されるのは、この作品が1947年という第二次世界大戦後の出版界の混乱期に刊行されたからというだけではなく、いくつかの *prépublications* を経て刊本化されたからであり、なおかつそれらの *prépublications* の一次資料が現在でも参照可能な状態にあるという、純粋に資料的な条件に負うところが大きい。

## 2. 『ボードレール』の刊行過程

サルトルの『ボードレール』は、パリ解放の1944年8月25日から一年も経たない1945年1-2月号の *Confluences* 誌に« *Un Collège spirituel* »<sup>5)</sup>というタイトルで部分的に発表され<sup>6)</sup>、1946年5月号(第8号)の *Les Temps Modernes* 誌に別の断片を« *Fragment d'un portrait de Baudelaire* »<sup>7)</sup>として刊行された後に、Point du Jour社から *Écrits intimes : Fusées, Mon Cœur mis à nu, Carnet, Correspondance* (1946)<sup>8)</sup>への165ページにも上る長大な序文としてその全体が初めて刊行された。その後同じく Point du Jour社からサルトルの序文だけを切り離したエディションが1946年に出されているが、前述の序文版との異同は、ページ番号のみだと伝えられている。その後、1947年にガリマール社より単行本として改めて刊行されている。

この『ボードレール』の執筆時期について、ボーヴォワールが *La Force de l'âge* (1960)の中で、サルトルが戯曲 *Les Mouches* と並行して執筆していた作品の中に *Confluences* 誌からの依頼原稿があり、それを既に送付したと言及している<sup>9)</sup>。サルトルのテキストで同誌に掲載されたのは、後に『ボードレール』へと発展する« *Collège spirituel* »と題された論考と1943年の4・5月号に掲載された戯曲 *Les Mouches* の断章のみである<sup>10)</sup>。*Les Mouches* は、1941年にジャン＝ルイ・バローがスタッド・ローラン・ギャロでエウリピデスの『救いを求める女たち』(仏題: *Suppliantes*) を上演した際に聞いたバローのことば<sup>11)</sup>に触発されて書いたサルトル

最初の戯曲作品である。戯曲の台本は 1942 年 12 月に印刷を終えており、1943 年 4 月から発売される。初演は 1943 年 6 月 3 日で、当時はシテ劇場と改名させられていたサラ＝ベルナル劇場（現在の Théâtre de la Ville）において、シャルル・デュランの演出、アンリ＝ジョルジュ・アダンの舞台美術で上演された<sup>12)</sup>。

ボーヴォワールは同誌に送った原稿を« articles critiques »と呼んでいることから、このボーヴォワールの回想において言及されているのが« Collège spirituel »、すなわち『ボードレール』の断章であったと考えることができるだろう<sup>13)</sup>。一方で *Cahiers du Sud* 誌は *La Nouvelle Revue Française* 誌に寄稿しなくなったサルトルが、パリ解放以前の 1943 年に 3 編の論考<sup>14)</sup>を寄せた雑誌である。

サルトルが原稿を同誌に送付した時期についてであるが、ボーヴォワールの回想録におけるこの記述は、サルトルが捕虜収容所から帰国して開始した「抵抗運動」である「社会主義と自由」についての記述とあわせて言及している。ドイツのトリアーにあった捕虜収容所 XII D から偽の診断書を使って解放されたのが 1941 年 3 月。同年 4 月 2 日<sup>15)</sup>にパリに戻ったサルトルは、E.N.S で哲学の« caïman »を勤めていたモーリス・メルロ＝ポンティが 1940 年の 10 月から始めていたレジスタンス運動である« Sous la botte »と連携して、新たに「社会主義と自由」« Socialisme et Liberté »を結成する。そして、1941 年の夏のヴァカンスを使ってボーヴォワールとフランス南部の非占領地区を自転車で回り、この運動に対する支援をジッドとマルローの二人のアンドレに要請する<sup>16)</sup>が不調に終わったことはよく知られている。つまり、ボーヴォワールが *La Force de l'âge* にサルトルの *Confluences* 誌への寄稿について記したのは、サルトルが収容所から帰国しバローのことばにインスピレーションを受けた 1941 年夏から *Les Mouches* が書き上げられる 1942 年 12 月までの一年半程度の間ということになる。

すなわち、*Confluences* 誌は遅くとも 1942 年の時点で既にサルトルから原稿を受け取っていたのである。同誌は、原稿を受け取りはしていたが、直ぐにそれを出版せず、パリ解放後（1944 年 8 月 25 日以降）に心機一転再開された同誌の最初の号、すなわちパリ解放から半年後の 1945 年 1-2 月号においてサルトルの論考を掲載したのである。とはいえ、原稿の完成と印刷時期に生じているずれに特別な意味を与えることはできないだろう。というのも、*Cahiers du Sud* 誌に掲載されたサルトルの最初の論考の掲載時期は、原稿自体が *Confluences* 誌へ寄稿したテキストと同じ時期に執筆されていたながら、*Cahiers du Sud* 誌の 1943 年 2 月号だからである。

ドイツ占領下にあったフランスにおいて、出版物は検閲によって規制されていたし、書店や図書館を対象にして配布されていた禁書一覧「オットー・リスト」の存

在はよく知られている。1940年6月のフランス敗戦を挟んで印刷業者は自主的に印刷機を破壊するか、南仏へ撤退するか、ドイツ軍の指揮下のもとに印刷を再開することになったし、さらにはそこに地下印刷が加わることで占領下におけるフランスの出版・印刷界の状況を複雑なものにしていた<sup>17)</sup>。財政的な観点を踏まえた上でパトリック・エヴノは、1940年から1946年にいたるまでのフランスの出版界が政治的な庇護を必要としていたこと、そして少なくとも1944年以前までは世論にイデオロギーを浸透させるという目的をはっきりと持っていたと指摘している<sup>18)</sup>。抵抗運動に参加している作家たちの間で、ドイツ占領地域の新聞や出版物には書かないことが暗黙の内に了解されていた<sup>19)</sup>ことも首肯することができる。

*Confluences* 誌は1941年にリヨンで創刊された文芸雑誌で初代の主幹はジャック・オバンクであった。彼は1941年9月の第三号まで主幹を務め、その後をルネ・タヴェルニエが引き継ぎ1944年12月まで務めている。1945年1月号からは「nouvelle série」と明記されて主幹もルネ・タヴェルニエからルネ・ベルトレに引き継がれ、1947年まで十一号を発行し廃刊している。前述したようにサルトルの『ボードレール』の断章が同誌に発表されるのはパリ解放後の1945年1-2月号であり、ドイツ軍による占領から解かれた時期にあたるが、この*Confluences* 誌は占領下のフランスにおいてもヴィシー政府およびドイツ軍によって認可された雑誌として確認されている<sup>20)</sup>ことも忘れてはならないだろう。

いずれにせよ、*Confluences* 誌についてはまだ調査が完了していないため、作品発表空間と作品との関係を再構成することは別の機会に譲らねばならない。

### 3. Point du Jour 版『ボードレール』

本論における報告の中心となるのは、最初に断章が掲載された*Confluences* 誌ではなく、テキストの全体が最初に掲載されたPoint du Jour社の版（以下、Point du Jour版）についてである。前述したようにPoint du Jour版は、1946年に同社から出版されたボードレールの*Écrits intimes : Fusées – Mon cœur mis à nu – Carnet – Correspondance* が刊行された際に付された、サルトルの序文である。テキストは実に165ページに及び、それに対してボードレールのテキストは100ページに満たない分量であった。目次を以下にあげる：

#### TABLE

INTRODUCTION	1
NOTE DE L'ÉDITEUR	2

FUSÉES	5
MON CŒUR MIS A NU	39
CARNET	81
CORRESPONDANCE	103 <sup>21)</sup>

Point du Jour 社はボードレールの *Écrits intimes* を「Incidences」と命名されたコレクションの第四号として刊行している。同書の表紙裏に次のような注意書きを認めることができる。

LE TIRAGE DE CE VOLUME, LE QUATRIÈME DE LA COLLECTION “INCIDENCES”, A ÉTÉ LIMITÉ A DEUX MILLE QUARANTE EXEMPLAIRES, TOUS NUMÉROTÉS, DONT QUARANTE SUR VERGÉ TEINTÉ DE RIVES NUMÉROTÉS DE I A XL, LES VINGT PREMIERS ÉTANT NOMINATIFS ; TROIS CENTS SUR VÉLIN DE RIVES IVOIRE NUMÉROTÉS DE 1 A 300 ET DIX-SEPT CENTS SUR VÉLIN TEINTÉ NUMÉROTÉS DE 301 A 2.000.

IL A ÉTÉ TIRÉ EN OUTRE CINQUANTE EXEMPLAIRES SUR VELIN DE RIVES MARQUÉS H.C.

EXEMPLAIRE N° 814 <sup>22)</sup>

この記述から同書が非売品を含めて 2090 部製作されたことが分かる。印刷はヴィシーの「Wallon」という印刷所で 11 月 3 日に完了し、1946 年の第 4 四半期に政府に納品されている<sup>23)</sup>。

ところで、Point du Jour 社の「Incidences」コレクションは 1944 年に第一号が発行されており、フランス国立図書館の蔵書目録では、以下にあげるように、全部で六号を確認することができる。

Vol. 1 : Honoré de Balzac, *Louis Lambert*, avec une première version inédite et une introduction par A. Rolland de Renéville, coll. « Incidences », Monaco, DAC (Paris, Impr[imerie] de Montsouris), 1944, XXVIII-179p.

Vol. 2 : Sébastien Roch Nicholas Chamfort, *Maximes et Anecdotes*, avec une biographie par Ginguené et une introduction par Albert Camus, coll. « Incidences », Monaco, DAC, 1944, XVIII-335p.

Vol. 3 : Donatien Alphonse François de Sade, *Les Infortunes de la vertu* [Texte imprimé], avec une notice de Maurice Heine, une bibliographie de Robert Valençay [sic pour Valançay] et une introduction par Jean Paulhan, coll.« Incidences », Paris, les Éditions du Point du jour (Vichy, impr[imerie] de Wallon), 1946, XLIII-245p.

Vol. 4 : Charles Baudelaire, *Écrits intimes Fusées-Mon cœur mis à nu - Carnet - Correspondance*, Introduction par Jean-Paul Sartre, les Éditions du Point du Jour (Vichy, impr[imerie] de Wallon), 1946, CLXV-277p.

Vol. 5 : Louis Antoine Léon Saint-Just, *Pages Choisies*, introduction par Jean Cassou, les Éditions du Point du Jour, 1947, XXIX-329p.

Vol. 6 : Gustave Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, avec une présentation nouvelle de la deuxième partie et une introduction par Raymond Queneau, coll. « Incidences », Paris, 1947, XXV-474p.

一瞥するだけでも明らかなように、タイトル自体は特に目新しいというわけではなく、ボードレール（1821-1867）の他は、バルザック（1799-1850）の *Louis Lambert*、シャンフォール（1741-1794）の選集、サド（1740-1814）の *Les Infortunes de la vertu*、サン＝ジュスト（1767-1794）の選集、フロベール（1821-1880）の *Bouvard et Pécuchet* が取り上げられている。取り上げられた作家は 19 世紀の作家が三名、フランス革命期のシャンフォール、サド、サン＝ジュストの三名も取り上げられている。注目すべきは、序文の執筆者であろう。1946 年版のプレイアド叢書 *Œuvres complètes* の編者の一人であったアンドレ・ロラン・ド・ルネヴィルを初めとして、アルベール・カミュ、ジャン・ポーラン、ジャン・カスー、レイモン・クノーと、戦前および戦時中に名を成した作家たちが序文を担当している。

さらに、*Louis Lambert* の場合にははっきりと確認することができるように、未刊行とは言わないまでも<sup>24)</sup>、オリジナルに忠実なテキストを刊行しようとする点に<sup>25)</sup>同コレクションの特徴を認めることができる。また、第二号のシャンフォールの箴言集に付された編集者のノートでも、刊行されるテキストの稀少性が強調されている<sup>26)</sup>。同コレクションに収められたテキストのこうした傾向は、サルトルの序文が付されコレクションの第四号として刊行される前の三号では確認できる。

一方で、第四号に付された編集者のノートからは、こうした掲載テキストの稀少性を強調することばが影を潜める。編集者は *Fusées, Mon Cœur mis à nu* がジャック・クレペが草稿原稿から校訂し 1938 年に出された *Mercure de France* 版を再録していることを述べている<sup>27)</sup>、*Carnet* に関しては、フェリクス＝フランソワ・ゴーチエによ

って注釈された 1911 年の Chevrel 版とその後シレーヌ社から出された版が編集者のノートにおいて言及されており<sup>28)</sup>、フランス国立図書館のカタログを検索した結果、「Incidences」コレクションでの刊行が 1911 年以來初の刊本化であることを確認することができる<sup>29)</sup>。そして最後に付け加えられたいくつかの書簡についても、例外はあるものの既刊の三タイトル<sup>30)</sup>からサルトルと編者が選んだ書簡が採録されている。つまり、第四号では、稀少な版のテキストを刊行するという方針から逸れて、比較的近刊のテキストから、序文執筆者と編集者がいくつかのテキストを選び、それらを編集し直して刊行するというスタイルがとられることになる。

この方針は第五号にも踏襲される。事実、第五号のサン＝ジュストの選集では第四号と同様に、序文執筆者のジャン・カソーと編者が、1908 年版のシャルル・ヴェレによって校訂された版からテキストの選定にあたったと明言されている<sup>31)</sup>。しかし、第六号の *Bouvard et Pécuchet* の発刊にあたっては、確かに第二部が 2 つのエディションに基づいて見直されているという新しさはあるものの<sup>32)</sup>、むしろクノーの序文の方が未刊行のテキストとして強調されることになる<sup>33)</sup>。

ひとつのキアスムが生じたわけであり、書籍のタイトルとなった作品よりもその作品に付された序文の方に刊行の力点が置かれたかのようである。そこで改めて書籍に占める序文の頁数を確認してみると、第一号 25 頁、第二号 16 頁、第三号 43 頁、第四号 165 頁、第五号 29 頁、第六号 25 頁となっている。ポーランがサドのテキストに付した序文が若干他の序文より長いものの、サルトルの飛び抜けて長い序文を除けば、20 から 30 頁という分量でまとまっている。コレクションの内部でキアスムが生じたように見えたとしても、分量という点に関していえば、サルトルの序文がやはり例外的だったということである。

コレクション各号の発行部数について確認してみると、第一号が 2013 部（非売品 7 部）、第二号 2060 部（非売品 10 部）、第三号 2040 部（非売品 35 部）、第四号 2040 部（非売品 50 部）、第五号 3120 部（非売品 80 部）、第六号 3120 部（非売品 80 部）となっており、第五号から発行部数が千部以上増えている。この変化の原因を第四号の商業的成功に見いだすことができるかもしれないが、それはあくまで憶測の域を出ない。しかし、第五号以降の発行部数の増加は、第四号を境としてある変化が生じたことを物語っている。

また、編集者のノートには常にではないがしばしば執筆者のイニシャルが付されている。第三号からは「R.B.」となっており、これについてミシェル・コンタとミシェル・リバルカは *Les Écrits de Sartre* の中でこのイニシャルを「René Bertelé」だと同定している。しかし、これまでの調査からは、こうした同定を支持する根拠は見つ

かっている。《Incidences》コレクションに記された《R.B.》をルネ・ベルトレとするならば、前章において既述したように、1945年1月から1946年4月までの期間 *Confluences* 誌の編集長を務めていた人物と同名ということになり、『ボードレール』の断片が最初に掲載された *Confluences* 誌と序文としてその全体が発表された『ボードレール』が結びつくことになる。この点については、今後の調査で確認予定である。

いずれにせよこれまでの考察から、Point du Jour 社の《Incidences》コレクションは、当初は未刊行のテキストを刊行するという方針が出されつつも、次第に序文にその重きを置くように方針転換が図られたという仮説が成り立つだろう。この仮説を検証するためには、《Incidences》の各号について、その内容を含めてより仔細に調査することが求められることはいうまでもない。それらの調査を通して、《Incidences》コレクションの性格がさらに明らかになるだろう。

《Incidences》コレクションの内的要請についての仮説以外にも、同コレクションの成立において忘れてはならない外的要素があるだろう。それは1944年の法改正の問題である。

パリ解放に伴って、フランスでは1944年から既に出版に関する法律が改正になった。1944年5月6日の法令で出版の自由が回復され、同年6月22日の法令で出版社の組織形態が明確化された。重要なのは8月26日と9月30日に出された法令では、ドイツ占領下にあって発行されていた雑誌や新聞の再発行が禁止され（8月26日令）、ドイツに協力した出版社や新聞社の財産の差し押さえが行われそれらの財産を新しく設立された新聞社などに配置し直す法令が出されているという事実である。このことは、新しい新聞・雑誌が優遇される状況を作り出すのであり、現在も続く日刊紙 *Le Monde* はこの時に創刊された新聞社の一つである。

Point du Jour 社の《Incidences》コレクションについても、時期的にはこの法令が出された後に印刷を終了しているため<sup>34</sup>か、印刷所が第一号ではパリだったものが、サルトルの序文が掲載された第三号からはヴィシーへと変更されている<sup>35</sup>。また、Point du Jour 社の所在地も第一号ではモナコだったが、第三号からはパリに変更されている。Point du Jour 版『ボードレール』の成立と作品の意義については、法改正の準備した背景についても明らかにする必要があるだろう。

## おわりに

本論においては多くの仮説と多くの疑問を羅列しただけにとどまっているとしても、サルトルの『ボードレール』の *prépublications* を対象とした調査を実施するこ

とによって、特に Point du Jour 版の *Écrits intimes* については、先行研究における問題点のいくつかを明らかにすることができたと考えている。今後はさらに *Confluences* 誌を対象とした調査を行い、その結果をサルトルの『ボードレール』と結びつけ同作品のパラテキスト的な要素が中心的テキストとどのように関わるのかについて考察した上で、最終的にはサルトルが初期批評作品を発表していた時代の作品成立のコンテクストを再構築したいと考えている。

#### 参考文献：

##### [一次資料]

Charles Baudelaire, *Écrits intimes : Fusées — Mon cœur mis à nu — Carnet — Correspondance*, Introduction par Jean-Paul Sartre, coll. « Incidences », Paris, les Éditions du Point du Jour, 1946. [BnF : MFICHE\_16-Z-480(4) / 16-Z-480(4)]

\* \* \*

Honoré de Balzac, *Louis Lambert*, avec une première version inédite et une introduction par André Rolland de Renéville, coll. « Incidences », Monaco (DAC), 1944. [BnF : MFICHE\_16-Z-480(1) / 16-Z-480(1)]

Chamfort, *Maximes et Anecdotes*, avec une biographie par Gioguené et une introduction par Albert Camus, coll. « Incidences », Monaco (DAC), 1944. [BnF : MFICHE\_16-Z-480(2) / 16-Z-480(2)]

Donatien Alphonse François de Sade, *Les Infortunes de la vertu* [Texte imprimé]. Avec une notice de Maurice Heine, une bibliographie de Robert Valençay [*sic* pour Valançay] et une introduction par Jean Paulhan, coll.« Incidences », Paris, les Éditions du Point du Jour, 1946. [8- DELTA- 7854 / RESERVE SP 8- DELTA- 7854 (Bibliothèque de l’Arsenal)]

Louis Antoine Léon Saint-Just, *Pages Choisies*, introduction par Jean Cassou, coll.« Incidences », les Éditions du Point du Jour, 1947. [BnF : MFICHE\_16-Z-480(5) / 16-Z-480(5)]

Gustave Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, avec une présentation nouvelle de la deuxième partie et une introduction par Raymond Queneau, coll.« Incidences », les Éditions du Point du Jour, Paris, 1947. [BnF : MFICHE\_16-Z-480(6) / 16-Z-480(6)]

##### [二次資料]

Pierre Albert, *La Presse française*, nouvelle édition, la documentation française, 2008.

Simone de Beauvoir, *La Force de l'âge*, coll. « folio », Éditions Gallimard, Paris, 1960.  
(シモーヌ・ド・ボーヴォワール、朝吹登水子・二宮フサ訳、『女ざかり』(上)、紀伊國屋書店、東京、1963年。シモーヌ・ド・ボーヴォワール、朝吹登水子・二宮フサ訳、『女ざかり』(下)、紀伊國屋書店、東京、1963年。)

Michel Contat et Michel Rybalka, *Les Écrits de Sartre*, Éditions Gallimard, 1970.

Donna Evleth (compiled by), *The Authorized Press in Vichy and German Occupied France, 1940-1944. A Biography*, Greenwood Press, Wesport, Connecticut, 1999.

Patrick Eveno, *L'Argent de la presse française des années 1820 à nos jours*, Comité des travaux historiques et scientifiques, Éditions du CTHS, 2003.

Gérard Genette, *Introduction à l'architexte*, coll. « Poétique », Éditions du Seuil, 1979.

Gérard Genette, *Palimpsestes. La littérature au second degré*, coll. « Points / Essais », Éditions du Seuil, 1982. (ジェラール・ジュネット、和泉涼一訳、『パランプセストー第二次の文学』、水声社、東京、1995年)

Gérard Genette, *Seuils*, coll. « Points/Essais », Éditions du Seuil, 1987.

Annie Cohen-Solal, *Sartre 1905-1980*, coll. « folio / essais », Édition Gallimard, 1985.

## 注 :

1) « On sait que, lors de sa prépublication en livraisons, ce roman était pourvu de titres de chapitres évoquant la relation de chacun de ces chapitres à un épisode de l'*Odyssee* : « Sirènes », « Nausicaa », « Pénélope », etc. Lorsque'il paraît en volume, Joyce lui enlève ces intertitres, d'une signification pourtant « capitalissime ». Ces sous-titres supprimés, mais non oubliés par les critiques, font-ils ou non partie du texte d'*Ulysse*? » (Gérard Genette, *Palimpsestes*, p.10)

« La situation *temporelle* du paratexte peut elle aussi se définir par rapport à celle du texte. Si l'on adopte comme point de référence la date d'apparition du texte, c'est-à-dire celle de sa première édition, ou originale, certains éléments de paratexte sont de production (publique) antérieure : ainsi des prospectus, annonces « à paraître », ou encore des éléments liés à une prépublication en journal ou en revue, qui parfois disparaîtront au volume, comme les fameux titres homériques des chapitres d'*Ulysse*, dont l'existence officielle aura été, si j'ose dire, entièrement prénatale : paratextes *antérieurs*, donc. » (G. Genette, *Seuils*, p.11)

2) 重見晋也、「文芸批評家サルトルとその時代 サルトル、ブラジヤック、モーリアック」、『広島大学フランス文学研究 21』、広島大学フランス文学研究会、2002年、pp.45-59。

- 3) Gérard Genette, *Introduction à l'architexte*, collection « Poétique », Éditions du Seuil, 1979. 本章本文に記した頁数は本書による。
- 4) « Le paratexte étant une zone de transition entre texte et extra-texte, il faut résister à la tentation d'élargir cette zone en rognant de part et d'autre. Le caractère indécis des limites n'empêche pas le paratexte d'avoir en son centre un territoire propre et incontestable où se manifestent clairement ses « propriétés », et que constituent ensemble les types d'éléments que nous venons d'explorer, et quelques autres. Hors de quoi l'on se gardera de proclamer à la légère que « tout est paratexte ». » (G. Genette, *Seuils*, p.410.)
- 5) Jean-Paul Sartre, « Un Collège spirituel », *Confluences*, n° 1, janvier-février, 1945, pp.9-18.
- 6) ミシェル・コンタとミシェル・リバルカによれば、1947年の Gallimard 版で 153-169 ページに相当する : cf. Michel Contat et Michel Rybalka, *Les Écrits de Sartre*, Gallimard, 1970, pp.116-117 : « Ce fragment correspond aux pages 153-169 de l'édition Gallimard (1947) et tire son titre d'une expression utilisée à la page 166. »
- 7) Jean-Paul Sartre, « Fragment d'un portrait de Baudelaire » dans *Les Temps Modernes*, n° 8, mai 1946, pp.1345-1377 : « Ce fragment, dédié à Jean Genet, correspond aux pages 58-114 de l'édition Gallimard et ne comporte pas de variantes. » (Contat et Rybalka, *ibid.*, p.142)
- 8) Charles Baudelaire, *Écrits intimes : Fusées — Mon cœur mis à nu — Carnet — Correspondance*, Éditions Point du Jour, 1946.
- 9) Simone de Beauvoir, *la Force de l'âge*, Éditions Gallimard, 1960, p.573 : « Nous travaillons beaucoup ; outre sa pièce, Sartre s'occupait de son traité de philosophie ; *Confluences* et les *Cahiers du Sud* lui avaient demandé des articles critiques : il leur en envoya. »
- 10) Cf. Contat et Rybalka, *op.cit.*.
- 11) Beauvoir, *op.cit.*, p. 326 : « Jean-Louis Barrault affirme, lui avait un jour impérieusement annoncé Olga, que le meilleur moyen pour une élève comédienne d'arriver à jouer un vrai rôle dans une pièce, c'est que quelqu'un écrive pour vous. » *Les Écrits de Sartre* にもエピソードが要約されている : cf. Contat et Rybalka, *op.cit.*, pp.88-89.
- 12) *Ibid.*, pp.88-89.
- 13) サルトルの自伝を著したアニー・コーエン＝ソラルは、ドイツ軍の捕虜収容所から帰国した時期のサルトルの活動について「Socialisme et Liberté」と題する章をもうけて記述しているが、この点には言及していない。

14) アルベール・カミュ、モーリス・ブランショ、ジョルジュ・バタイユを取り上げた次の三編だが、ブランショ論は二号に、バタイユ論は三号に涉って掲載されている : « Explication de *L'Étranger* », dans *Cahiers du Sud*, n° 253, février 1943, pp.189-206; « Aminadab ou du fantastique considéré comme un langage », dans *Cahiers du Sud*, n° 255, avril 1943, pp.299-305 et n° 256, mai 1943, pp.361-371; « Un nouveau Mystique », dans *Cahiers du Sud*, n° 260, octobre 1943, pp.782-790 et n° 261, novembre 1943, pp.866-886 et n° 262 décembre 1943, pp.988-994.

15) Annie Cohen-Solal, *Sartre 1905-1980*, coll. « folio / essais », Édition Gallimard, p.291 : « Paris, 2 avril 1941. Un an tout juste qu'il n'a pas remis les pieds dans la capitale. »

16) Cf. Beauvoir, *op. cit.*, pp.566-567 および Cohen-Solal, *op. cit.*, pp.307-311.

17) « La situation empire en juin 1940, à cause de la défaite française, qui conduit une partie de la presse à se saborder, une autre partie à se replier en zone Sud et une troisième partie à tenter de reparaître, après une interruption totale de trois semaines, sous la tutelle de Militärbefehlshaber im (sic) Frankreich. Cette situation emrouillée est encore compliquée dans les mois qui suivent par la naissance et l'essor d'une presse clandestine. » (Patrick Eveno, *l'Argent de la presse française des années 1820 à nos jours*, Comité des travaux historiques et scientifiques, Éditions du CTHS, 2003, p.113.)

18) « Les entreprises de presse deviennent alors déficitaires et les différentes tutelles doivent compenser le manque à gagner. Cette situation se prolonge au-delà de la guerre, lorsque la presse de la Résistance tente d'imposer aux lecteurs sa vision politique du monde. Ainsi, de 1940 à 1946, la presse française vit sous une tutelle politique, certes beaucoup plus draconienne et surtout beaucoup plus monstrueuse avant 1944, qui vise à faire passer des idéologies dans l'opinion française. » (*Ibid.*, p.114.)

19) Cf. Beauvoir, *op. cit.*, p.554 : « Celui-ci [=Délange] réussit d'ailleurs à donner à son journal un ton qui tranchait sur celui du reste de la presse ; il protesta contre les délations auxquelles se livrait *Je suis partout* ; il défendit les œuvres qui s'opposaient aux valeurs fascistes et au moralisme vichyssois. Néanmoins, la première règle sur laquelle s'accordèrent les intellectuels résistants, c'est qu'il ne devaient pas écrire dans les journaux de la zone occupée. »; « Les écrivains de notre bord avaient tacitement adopté certaines règles. On ne devait pas écrire dans les journaux et les revues de zone occupée, ni parler à Radio-Paris : on pouvait travailler dans la presse de la zone libre et à Radio-Vichy : tout dépendait du sens des articles et des émissions. Publier un livre de l'autre côté de la ligne était parfaitement licite ; ici, la question se posait ; finalement on estima que, là aussi, c'était

le contenu de l'ouvrage qui comptait. » (*Ibid.*, p.588.)

20) Cf. Donna Evleth (compiled by), *The Authorized Press in Vichy and German Occupied France, 1940-1944. A Biography*, Greenwood Press, Westport, Connecticut, 1999, p.156 : « CONFLUENCES. In Lyon. Monthly. 1941-1943. Literary magazine. “The staff of CONFLUENCES has sought since 1941 to give a precise and documented picture of French intellectual activity.” Resumed publication after the war. (B[ibliothèque]N[ationale de France]) »(*sic*). Evleth の資料は、1942 年から 1944 年までの *Annuaire de la Presse* に Archives nationales の F41 シリーズと BnF の *Bibliographie de la presse française politique et d'information générale 1865-1944* を対象として行った調査の結果であるが、同書においては引用のとおり 1943 年に刊行が停止されたとなっている。しかし、現在のフランス国立図書館のデータベースでは 1944 年も刊行を続けていたことが確認される。

21) Baudelaire, *ibid.*

22) MFICHE\_16-Z-480(4)。ただし、16-Z-480(4)では« EXEMPLAIRE N° 453 »となっている。

23) 巻末最終頁下に次の記述がある : « N° d'impression : 41, — Dépôt légal : 4<sup>e</sup> trimestre 1946. — O.P.L. : 31.3744 » (*Ibid.*, p.588)。

24) « Le texte que l'on va lire peut être considéré à juste titre comme une première version inédite de *Louis Lambert*. Il est extrait de l'abondante collection de manuscrits de Balzac recueillis par le vicomte de Spoelberg de Lovenjoul et légués par lui à l'Institut de France. Il a été publié une seule fois dans *Mesures* (1935), précédé d'une introduction de M. Bernard Guyon, qui en retrace l'historique et en précise l'importance. » (« Note de l'éditeur », Honoré de Balzac, *Louis Lambert*, avec une première version inédite et une introduction par A. Rollande de Renéville, coll. « Incidences », Monaco, 1944, p.2.)

25) « Le texte de *Louis Lambert* que nous donnons ici est, à très peu de choses près, conforme à celui de l'édition Furne (*Œuvres complètes (sic)* de M. de Balzac, Paris, 1842, 17 vol. in-8°), qui est la plus sûre, Balzac l'ayant revue lui-même. Nous avons seulement tenu compte des quelques très légères corrections que M. Marcel Bouteron y a ajoutées dans l'édition de Balzac qu'il a établie pour *La Pléiade* (Gallimard, éditeur) », (« Bibliographie », *ibid.*, p.16)

26) « Il nous a paru intéressant de publier la biographie qui suit, la plus complète et la meilleure qu'on ait écrite sur Chamfort. Elle figure au tome I de l'édition de ses œuvres, donnée par Ginguené en l'an III de la République. » (« Note de l'éditeur », Chamfort,

*Maximes et Anecdotes*, avec une biographie par Gioguené et une introduction par Albert Camus, coll. « Incidences », Monaco, 1944, p.2.)

27) « C'est en ces termes que M. Jacques Crépet, auquel il faut avoir recours chaque fois qu'il s'agit de Baudelaire, présente les *Journaux intimes* dans son édition du *Mercure de France* (1938) qui consititue aujourd'hui l'état le plus parfait de l'établissement et de l'interprétation de ce texte. Ce sont les manuscrits même de Baudelaire que M. Jacques Crépet a reproduits dans son édition. » (« Note de l'éditeur », in Baudelaire, *op.cit.*, p.2.)

28) « Le *Carnet*, dont nous publions ici les fragments qu'en a donnés Jacques Crépet dans son édition des *Journaux intimes* du *Mercure de France*, a été publié d'abord à 100 exemplaires, facsimilé autographe, avec une introduction et des notes par Féli Gautier (Chevrel, 1911), puis une seconde fois par La Sirène (sans date). », *ibid.*, p.3.

29) Sirène 社版の刊行年はカタログでは未記載となっている。

30) « On peut dire cependant que la plus grande partie de sa correspondance, et sans doute la plus importante a été publiée, entre autres, dans les trois volumes suivants :

Charles Baudelaire - *Lettres-1841-1866* - (Mercure de France, 1906).

Charles Baudelaire - *Lettres à sa mère* - (Calmann-Lévy, 1932).

Charles Baudelaire - *Dernières Lettres inédites à sa mère* - Avertissement et notes de Jacques Crépet. (Éditions Excelsior, 1926).

Toutes les lettres que nous publions ici, sauf celles du 30 juin 1845 et du 26 août 1851, ont été choisies dans ces trois volumes. » (*Ibid.*, p.4.)

31) « L'édition la plus complète et la plus sérieusement établie des écrits de Saint-Just est, à l'heure actuelle, celle que nous devons à M. Charles Vellay (*Œuvres complètes de Saint-Just*, deux volumes Fasquelle 1908). C'est dans cette édition que nous avons établi avec M. Jean Cassou le choix que nous donnons ici. » (Louis Antoine Léon Saint-Just, *Pages Choisies*, p.2)

32) « Note de l'Éditeur », in Gustave Flaubert, *Bouvard et Pécuchet*, coll. « incidences », Paris, 1947, p.2 : « Les fragments qui constituent ici la seconde partie du roman proviennent, soit de l'édition Conard (*Œuvres complètes*, 1910), soit de l'ouvrage de D.-L. Demorest, *A travers els plans, manuscrits et dossiers de Bouvard et de Pécuchet* (Conard, 1931). Seule la présentation de ces fragments est nouvelle. »

33) Raymond Queneau, « Introduction », *ibid.*, p.I : « En 1942, j'ai écrit pour une édition (belge) de Bouvard et Pécuchet, qui ne parut jamais, une introduction qui fut publiée dans le numéro 31 de Fontaine, alors à Alger »

34) Balzac, *op.cit.*, p.179 : « ACHEVÉ D'IMPRIMER LE 8 OCTOBRE 1944 SUR LES PRESSES DE L'IMPRIMERIE DE MONTSOURIS, A PARIS, POUR LA D. A. C., A MONACO. ».

35) 印刷所は第一号が Montsouris、Paris、第三号からヴィシーに変更され、第五号からは再びパリに戻り「LES PRESSES DE VILLAIN ET BAR IMPRIMEURS A PARIS」と記されている。

## Les Paratextes du *Baudelaire* de J.-P. Sartre

— rapport provisoire de la recherche sur l'état du texte aux éditions Point du Jour —

Shinya SHIGEMI

On connaît, d'une façon générale, plusieurs imprimés précédant la publication en volume d'une œuvre littéraire. C'est ainsi que Gérard Genette souligne l'importance de ce qu'il appelle la « prepublication » en prenant l'exemple de l'*Ulysse* de James Joyce dans ses recherches sur la transtextualité qui commencent par l'*Introduction à l'architexte* (1979) et se prolongent jusqu'aux *Palimpsestes* (1982). L'idée est d'autant plus importante, quand on fait face à des œuvres du XX<sup>e</sup> siècle, époque où s'est multipliée la publication partielle et préalable des textes dans des revues ou dans des journaux.

Le *Baudelaire* de Jean-Paul Sartre connaît aussi une prépublication avant que l'ouvrage serve au préface aux *Écrits intimes* de Charles Baudelaire publiés par les éditions Point du Jour en 1946. Un premier texte, partiel donc, fut rendu public en 1945 dans la revue *Confluences*, et un autre fragment fut imprimé dans *les Temps modernes* au cours de la même année.

Or les *Écrits intimes* préfacés par Sartre font partie avec cinq autres titres d'une collection nommée « Incidences ». La recherche menée à la Bibliothèque nationale relative à la collection intégrale nous révèle qu'elle se caractérise par ses préfaciers et par ses textes. En effet, les préfaces sont rédigées par des écrivains déjà connus comme Rollande de Renéville, Albert Camus, Jean Paulhan, Jean Cassou et Raymond Queneau; et l'on y publie des textes, soit inédits, soit rarement édités auparavant.

La collection est accompagnée d'une note de l'éditeur dont le nom est donné en abrégé comme « R. B. », surtout après le troisième numéro. Michel Contat et Michel Rybalka l'identifièrent comme « René Bertelé » dans leurs *Écrits de Sartre*, mais le nom « René Bertelé » évoque le rédacteur en chef de la revue *Confluences* dans la nouvelle série depuis 1945. Il reste à vérifier cette piste pour confirmer l'existence d'une relation étroite entre la collection « Incidences » des éditions Point du Jour et la revue *Confluences*.

Aussi resterait-il encore des recherches à mener afin de rétablir la relation entre la revue et la collection dans la perspective génétique du *Baudelaire* de Sartre, et il faudrait poursuivre celles-ci en suivant la filiation des documents concernant les lois sous le régime Vichy et sous l'Occupation aux Archives nationales ou d'autres bibliothèques. Nous ferons aussi à l'occasion un rapport de ces différents résultats.